

〈軍服と修道衣〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

戦時下の性暴力問題といえば、日本も決して他人事ではない。それどころか、戦後七〇年経つ今なお重く引きずっている。地球上の戦争や紛争のある所では、どんな形にせよ弱い者が武器を持った者たちの暴力の被害を真っ先に受けるのが悲しい現実だ。

本作は、第二次世界大戦終結直後のポーランドで実際に起こった衝撃的な事件に基づく。さまざまな事情で長らく語られることがなかったが、フランスの女性監督アンヌ・フォンテーヌが初めて映画化した。事件とは、ソ連軍兵士によるカトリック系修道院での集団強姦事件である。

一九四五年一二月。ポーランドにある軍の赤十字病院で負傷兵を祖国に帰還させる任務についていた若いフランス人女医マチルドのところに、ただならぬ様子の修道女が駆け込み、助けを求め。言葉もわからず、一旦は断った

が、雪の降り積もった戸外で何時間も祈り続ける姿に心打たれ、軍用ジープで修道院へ。そこでマチルドはありえない光景を見る…。

信仰と妊娠は両立しえないはずの若い修道女が、修道衣の下に臨月のお腹を抱えて苦痛に泣き叫ぶ姿。たじろぐ間もなく、緊急手術で帝王切開し、辛くも母子を救うマチルド。

しかし、何があったのか。この重苦しい空気は異常だ。修道院長のマザー・オレスカと補佐役のシスターが重い口を開く。戦争末期、敗走したナチス・ドイツ軍と入れ替わりにこの地を占領したソ連軍の兵士らが修道院を襲撃、数日間居座った。その悪夢のような期間に二〇人が強姦され、そのうち七人が妊娠した、と。地域社会から孤立し、身を潜めるようにひっそりと暮らすうちに、修道女たちのお腹が膨らんできて、中には危険な状態に陥る者も。意を決

して、こっそり救援を求めに街へ出かけて、マチルドを連れて来たのが補佐役のシスターだった。

マチルドは昼間の病院勤務を終えると、深夜の森を抜けてジープで密かに修道院へ通い始める。危険は暗い雪道ばかりではない。運悪くソ連軍の検問に引っかかり、あわや自身が強姦ざりざりという目にも遭う。だが、いまやマチルドは修道女らの生きる望みなのだ。修道女の中には自殺する者や修道院を去る者も。院長は心痛から倒れた。この危機にかえってマチルドと修道女らとの気持ちはひとつにつながっていく。

当時、スターリン・ソ連の傀儡政権となったポーランドでは、宗教は否定され、修道院自体無用の存在。まして女性保護や人権などの発想はない。何より「世間の目」という古い道徳規範があり、どんな理由からであれ、未婚者が妊娠することを許さず、その責任は妊娠した者にあり、大いなる恥とされた。だから、この事件は決して外部にもらしてはいけない、という院長の秘密主義の根柢はここにあった。だが、これではないつまでも解決はない。前を向いて進もう！と、マチルドの考えた驚くべき提案とは…。悲劇に負けない見事な愛の智慧。ラストに救いあり。



『夜明けの祈り』

フランス・ポーランド合作映画(115分)

監督：アンヌ・フォンテーヌ

出演：ルー・ドゥ・ラージュ、アガタ・ブゼク、アガタ・クレシャほか

8月5日(土)より、ヒューマンラストシネマ有楽町ほか全国順次ロードショー

© 2015 MANDARIN CINEMA AEROPLAN FILM MARS FILMS FRANCE 2 CINÉMA SCOPE PICTURES